

## 嵯峨の釈迦堂

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 清凉寺本堂 正面に「梅檀瑞像」の額が揚がる

はじめに 観光客で賑わう嵐山の渡月橋を渡り、北にまっすぐ延びる長辻通りの突き当たりに、ひととき目を引く重層の山門（仁王門）がそびえています。山門をくぐると正面に三国伝来（インド～中国～日本）と伝わる国宝・梅檀釈迦如来立像が安置されている五台山清凉寺の本堂が見えます（写真1）。地元では通称、嵯峨の釈迦堂の名で親しまれています。

清凉寺境内では、これまでに本格的な発掘調査は行なわれていませんが、境内で採取された平安時代の軒瓦や試掘調査の成果に基づいて、寺史の一端を紹介します。

**清凉寺の変遷** 清凉寺は、光源氏のモデルとして知られる源融の別荘であった嵯峨観を、没後に阿弥陀堂を建てて嵯峨寺としたことに始まります。

平安時代中期になると、奈良東

大寺の僧、奄然が永観元年（983）に宋に渡り、梅檀釈迦如来立像を模刻して日本に請来します。奄然

の没後、長和5年（1016）に弟子の盛算が嵯峨寺の釈迦堂にこの仏像を安置し、清凉寺としました。

その後、平安時代末期頃から、釈迦信仰の高まりとともに、清凉寺の釈迦如来立像への信仰が広まりをみせます。また、保元元年（1156）比叡山を下りた法然が釈迦堂に七日参籠起請したのを始め、鎌倉時代になると浄土宗の発展とともに清凉寺は浄土宗の拠点となります。弘安2年（1279）からは、円覚が融通念仏による大念仏会を盛んに行なうようになり、浄土宗寺院としての性格が強くなっていきました。

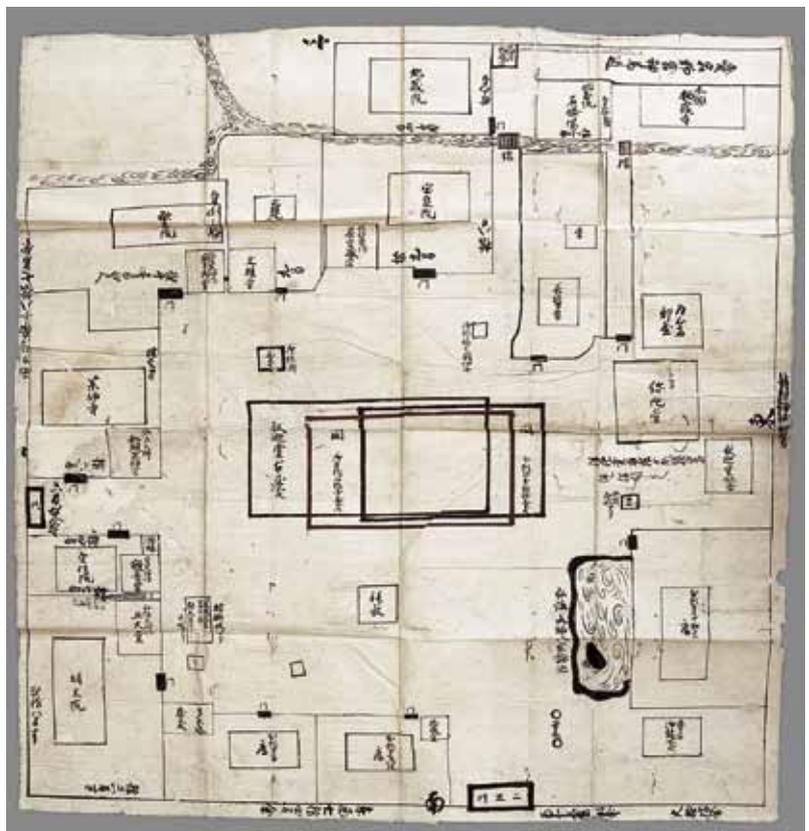


写真2 清凉寺古地図（大覚寺蔵）製作年不詳、嵯峨大火以前のものとみられる

このような変遷を反映して、清涼寺に伝来する文化財にも特徴がみられます。阿弥陀三尊像を中心とする棲霞寺以来の仏像群、齋然請来の釈迦如来立像に関する仏像群や関係遺品、さらに鎌倉時代以降の浄土宗発展に関係した絵画や書蹟などがあり、建造物を含めて、いずれも国や府の指定文化財となっています。

清涼寺は鎌倉時代前期の建久元年(1190)、建保5年(1217)に平安時代以来の主要伽藍を焼失しています。その後、明恵<sup>みょうゑ</sup>などの尽力により復興しましたが、再び応仁の乱の兵火により山門、多宝塔、五大堂などが焼失しました。17世紀初頭には豊臣秀頼により諸堂の再建がなされましたが、寛永14年(1637)の嵯峨大火により、三たび清涼寺の本堂以下ほとんどの伽藍が炎上してしまいました。現在の伽藍は、徳川家の支援を受け文久3年(1863)に整備されました。寺域については、現在の境内の南辺と西辺に残る築地が創建時の位置を踏襲していると考えられます。

**境内から採取された軒瓦** 昭和26年と昭和36年に、境内の北半

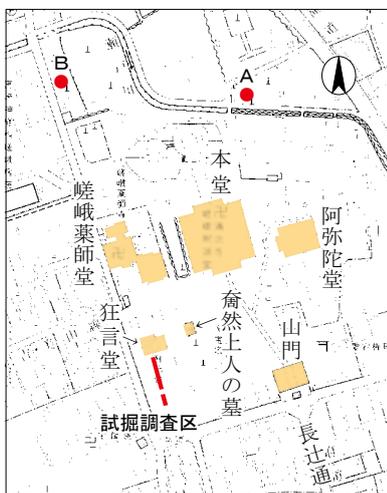


図1 清涼寺境内の調査地点

部で採取された軒瓦があります。採取地は1・2・4が地図のAから、3はBからです(図1)。1・2はいずれも蓮華文軒丸瓦です。3・4は唐草文軒平瓦で、4には文様右下には「西」の字が陽刻されています(図2)。2・3は西賀茂瓦窯、4は大山崎瓦窯の製品と見られ、平安宮のほか嵯峨院跡などで出土しています。いずれも平安時代前期の軒瓦で、本堂内の展示室で見学することができます。

**境内の試掘調査** 平成16年1月、境内の西南端に現存する狂言堂(写真3)の南で試掘調査を行ない、中世から近世の遺構を検出しました。遺構は石組み井戸やゴミ穴で、室町時代の土師器皿が多量に棄てられた状態で出土しました(写真4・図1)。

大覚寺に残されている『清涼寺古地図』には「明王院」と記されています(写真2)。また、狂言堂の付近は「宝性院」と記されています。検出した遺構は、これら子院に関するものと見られます。

**まとめ** 採取された軒瓦は、いずれも平安時代前期の製品であることから、清涼寺の前身である棲



写真3 嵯峨大念仏狂言が演じられる狂言堂



写真4 狂言堂の南で見つかった井戸跡

霞寺に関するものと考えられます。また、境内の西に現存する狂言堂の南での試掘調査によって、清涼寺古地図に示された本堂西の子院の状況の一端も明らかになりました。このように、わずかな調査にもかかわらず、検出した遺構や遺物から清涼寺の歴史の変遷の過程をうかがい知ることができました。(加納敬二)

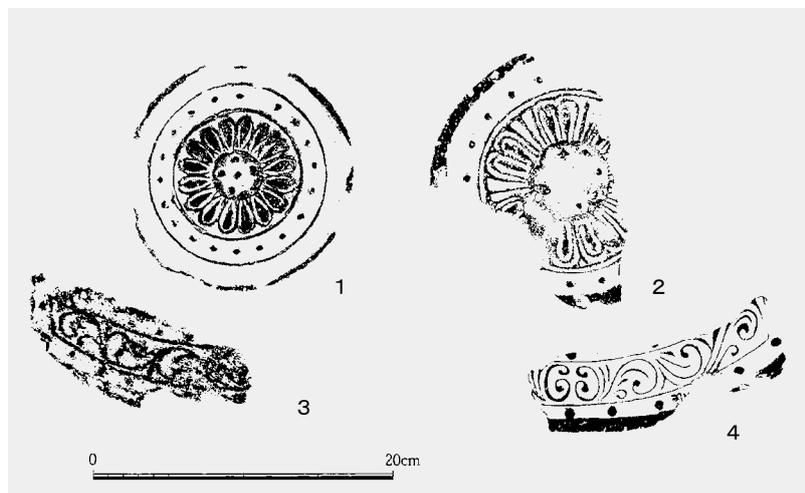


図2 境内から採取した軒瓦の拓影